

時潮の流転

(昭和十四年寮歌)

望月真三郎君 作歌
竹村伸一君 作曲

一

時潮じちようの流転ながれそう々と
四季とき乾坤けんこんに巡り立つ
去来きよらい常じょうなく人ひと変り
有情うじよう無為むゐの時鐘かねの音に
孤城こじやうの爽春はるは未だ浅し

二

遠く流離りうりの春はるに来て
此この高楼たかのうに春愁うれひつつ
郭公かくこう鳥の鳴くさへも
多感たかんの児等こらの情懷むね熱く
懷古かいこの涙なみだ溢るべし

三

真日まひ澄む北きたの蒼穹そうくうはるか
飛燕ひえんひとたび音に鳴けば
桃李とうりの華影かげは瘦せゆきて
あはれ旅寝たびねの若き遊子わかよ
帰南きなんの郷愁おもひしきりなり

四

夕陽せきやう西に落ち行けば
白樺しらば林朱はやしに染み
暮秋ぼしゅうの颯かぜは飄々ひょうひょうと
時艱じかんを憂ふ国の子この
悲腸ひちやうの声こゑに似たるかな

五

北斗ほくと地平ちへいに摇曳ゆれぐとき
天地てんちの四大しだい霜しもと凝り
四寮しりようの高夢ゆめも凍てつきて
ほがらほがらの朝あさぼらけ
帰雁きがんの孤影かげよ月に飛ぶ

六

明日あす別れ行く旅人たびひとの
春はるの夕べゆうの宴遊うたげかな
かへらぬ絢夢ゆめをしのびつつ
生命いのちの故郷さとと慨嘆なげきしも
すでに三星みとせ霜せの草枕くさまくら